
LOVE・LOVE・LOVE

章久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE・LOVE・LOVE

【Nコード】

N9668V

【作者名】

章久

【あらすじ】

恋愛小説です。

遠距離恋愛、愛の証、そして、別れの手紙

事実に基づいた小説があり、ノンフィクションあり、心の叫びあり、同じような気持ちで悩んでいる人、切なくなっている人に、少しでも癒されてくれたら幸いです。

〳〵第1話 京都にて〳〵

晃一は、新幹線京都駅のホームから改札を抜けて、メインストリートを歩いていった。

待ち合わせの時間までは、まだ1時間以上あった。

久しぶりの京都だった。確か、以前にここに降り立ったのは、まだ歩くだけで汗が吹き出ていた季節だったように思う。

彼は、京都に限らず、大阪、神戸など関西方面が好きだった。それは、彼が東京に住んでいる、という理由だけでなく、寒々とした東京のビル群と忙しなく行き来する会社員たちに比べて、どこかホッとする気がするからだ。

だからと言って、こちらに住みたいと思ったことはない。やはり東京で、冷たいように見えて、人間味のある仲間に囲まれて生活することに慣れてしまったからかもしれない。

晃一は、待ち合わせに使っている喫茶店を見つけると、まだ早いが迷わず中に入って、ブレンドコーヒーを注文してから、好きな読書を始めた。

気持ちには落ち着いていた。勿論、これからの過ごす時間を考えると、落ち着いて読書をしている場合ではないのだが、だからこそ余裕のあるフリをしているのかもしれない。

既に季節は紅葉の美しい時期になっていた。

随分と時間を空けてしまった。それでもじっと待っていた彼女は、とても我慢強い。

頭が下がる想いだ。

新幹線の中ではずっと寝ていた。だから、気分は最高だったし、疲れも全くない。

あとは、再会を祝って、とびきり美味しい食事をしてから、今迄の空白を埋めてやるだけだった。

いや、晃一はそう想っているが、果たして相手もそう感じているだろうか？

不安な気持ちがないわけでもない。

随分とほったらかしにしていた。長い時間一人にしてしまった。仕事事が忙しかった、は言い訳にならない。

電話やメールはマメにしていたつもりだが、そんなことで納得するほど、世の中の女性は物分りがいいとは思っていない。

やはり、しっかりと抱き締めてやらないと、きつと気づいたらずっと遠くの手の届かない距離に、背中を向けて歩いているに違いない。

晃一は、静かに本を閉じた。

果たして、前回に見たあの笑顔が見られるだろうか。

確かに、今回の約束に快く応じた。だが、それが最後の時間ではないと誰が断言できるだろうか。

そんな不安な気持ちになるほど、長い時間一人にしてしまっていたように思える。

やがて再会の時間が迫ってきた。あれほどの余裕が今はちよつとした不安と心配で心が落ち着かない。

本当に現れるだろうか。

今は、まだキャンセルのメールも電話も入らない。

午前11時。約束の時間がきた。その間、何の連絡もなかった。それが一層の不安感を増幅させた。

あまりの落ち着きのなさに、晃一は喫茶店を出た。待ち合わせは、

この喫茶店の中だったが、晃一は店を出てしまった。
気持ちが悪く落ち着かなくなったのだ。

いつもと変わらない笑顔で現れるだろうか。

いや、深刻な表情で、「実は・・・」と、晃一が最も恐れている台詞を言い始めるのではないだろうか。

嫌な予感が頭の中を駆け巡った。こんなときのカンが不思議と当たるのである。

「あれえ、お店の中じゃなかったの、待ち合わせ」

不意に、聞き慣れた声が入って、晃一は悄然と声の方に目を向けた。

目の前には、数ヶ月前に見たときと同じ、優しく、純粋で、そして愛に満ち溢れた笑顔が、晃一をしっかりと見つめていた。

「とっても会いたかったあ。やっと会えたね」

そう言って、美帆子は晃一の腕に自分の腕を絡めて、ぴったりとくっついてきた。

「ごめんな。あんまり会えなくて」

「ううん、いいの。こうちゃんが仕事忙しいの、わかってるもん。」

それよりも、こうして遠い京都まで会いに来てくれることが嬉しい」

「そっか」

晃一は、ぴったりとくっついて、満面の笑顔で再会を喜んでいる彼女を見つめて、

オレは一生、この女を離さないだろう。絶対に、この女を幸せにしたい。

と、心に誓ったのである。

次に会うときは、婚姻届を目の前に突きつけてやろう、と密かに考えていた。

【終】

〳〵第2話 愛 撫〳〵

微かに潤っているのがわかった

恥ずかしさと、ちょっとした快感で、そこはいつもより朱に染まっていた

綺麗なピンク色のそれは、私にとって特別な聖域であるとともに、憧憬でもあった

素敵だ、なんともいいようがないほどに素敵だった

だが、それは、誰のものでもないという訳ではなく、心から愛したい、永遠の愛を誓った貴女の大事な部分だからこそ、私が欲しくて欲しくて仕方がなかったものなのだ

美しい、とても美しい

それは、今まで見たことがないくらい美しい湖畔で、冷たく澄んだ水に透き通った湖底に漂う水草のように、自由に純粹で滑らかに生きていた

私の舌が、貴女の大切な秘部をゆっくりと、丁寧に愛撫している姿を想像して、体中が内部から火照っていくのを意識していた

柔らかく隆起して、そこから滑らかに滑るようにうねっている貴女

の花園は、とても綺麗で艶めかしかった

その、溢れる泉で喉を潤おし、奥の方で息づく柔らかい生命の源を、いつまでもいつまでも感じていたかった

そして、貴女の小さな口から漏れる溜息を受け止めて、崇高で時間を超越した世界へと貴女を誘い、やがて満足感に浸って、幸福の眠りにつくまで、私は貴女の体を熱く溶かしてゆくのだ

ああ、本当に美しい

どうしてそんなに美しいのか

私は、貴女の妖しく輝く秘密の楽園に、ゆっくりと、静かに、そして丁寧で一つ一つを記憶に留めるように、口づけをしながら、奥の鼓動が激しくたなびく命の海原まで辿り着けるように、舌を精一杯伸ばしていった

そして、貴女の喉から押し出すような悦びの声を聞いたとき、私は最後の仕上げに向かっていく……

【終】

〳〳第3話 新神戸駅にて〳〳

後ろ髪を引かれる想いで電話を切った。

いつまでも話していてもキリがないことは確かなのだが、声を聞いているだけで、どこか平穏で、安らぎを感じてしまうので、電話を

切ることが躊躇われる。

相手もそう感じているだろうか
もっともつと話してたいと想ってくれているだろうか
などと考えながらも、自分の気持ちを抑えて、静かに携帯電話を閉じる。

世の中には、きっと私が考えている以上に、遠距離恋愛を強いられている人や、なかなか逢えない境遇にある恋人同志が溢れているのだろう。

愛する人を身近に探すことは、もしかしたら最も安直で簡単な事なのかもしれないが、恋愛はそういうわけにはいかないし、むしろ、出会いがいつ、どこに、どういう形で転がっているかもしれないのだから、一旦恋に堕ちれば、二人の距離も、環境も、身分も、何もかも無関係だ。

それでいい。恋とはそういうものだと思っているからだ。

好きな人のぬくもりを、すぐに感じたい

好きな人の微笑を、自分の目で確かめたい

好きな人の声を、電波を通じてではなくこの耳で、その場で聞きたい
好きな人の愛を、いつでも傍で感じていたい

男も女も誰もが想うことであり、ささやかな願いでもある。

私は、新幹線の新神戸の駅に降り立った。手前には神戸の街が全て見渡せる高層ホテルがあり、その先には、夜になったらとても綺麗だろうと思える神戸の街並みが広がっている。
そして、その先は海だ。

私は、一人の女性を待っていた。気持ちが昂ぶっているのがわかる。逢いたいと何度も願っていた相手であり、それが叶う一瞬でもある。緊張感が高まるが、期待とこれから過ごす時間の大切さに、喜びの方が勝ってくる。

これから何を話そうかとか、どこに行こうかとか、何を食べようか、など、決めなければならないことは沢山あるのに、そんなことよりも、早く逢って相手のぬくもりと笑顔を肌で感じたい。そんな気持ちが心と体を支配していた。

ちょっとした時間逢うだけで、電話で話した何十回にも相当するし、メールでのやりとりの何百回にも勝る。

逢う、ということの重要性はやはりそこにあるのだと思う。

すれ違いや誤解も、ちよつと逢って話すだけで解決してしまうことだってあるのだ。

だからこそ、逢うことを人は望み、そして欲するのだ。

数分後には、私の愛する人が目の前に現れて、私に微笑みかける。きっと私は、ぎこちない笑顔でそれに返し、そして、小さく頷いたあと、そつと相手の肩を抱き寄せて、自分の体温が相手に伝わるくらい長い時間抱き締めているに違いない。

そして耳元で「逢いたかったよ」と優しく呟いて、人が見ているのもお構いなしに、私は相手の薄いピンク色に光っている唇に、そつとくちづけをするだろう。

彼女はびっくりしたように目を見張るが、私から離れようとはせず、やがて静かに瞳を閉じて、体の力を抜いていく。

私の熱い想いが全て彼女の唇から伝わっていくように、私の永遠の気持ち、繋がっている部分を通して彼女の心に満ち溢れていくように。

私は、そっと唇を離すと、軽く彼女の肩を抱いて、神戸の街並みに向かって歩き出す。彼女も歩調を合わせるように、一緒に歩き出す。それは、これからの人生を二人で歩いていこうとお互いに決めていて、小さな一歩から歩き出したように。

今夜、私は神戸の夜景の中で、彼女に永遠の愛を誓うだろう。

今夜、彼女は神戸の夜景に染まりながら、私の愛に包まれて溶けていくだろう。

永遠の愛・・・絶対存在するはずだ。

こうして相手を思いやる気持ちがなくならない限り・・・

【終】

～～第4話 空港にて～～

空港に降り立った瞬間、爽やかな風が頬を掠めた。

と同時に、あなたの匂いがした、気がした。

もちろん、そんなことは思い過ぎしに決まっている。

なぜなら、あなたに逢うのは今日が初めてだから、あなたの香りがどんなものなのかなんて、わかるはずないから。

ここに来るのは何年ぶりだろう。十数年前に、有名なテーマパークに遊びに来て以来だと思う。

そう何度も来ているわけではないのに、なぜか懐かしさがこみ上げてきた。

そして、ここに立っている経緯を思い出してみた。

あなたと知り合ったのは3ヶ月前だった。

無理矢理あなたの領域に踏み込んだわたしを、あなたは戸惑いながら、ちよつとだけ疎ましそうに、それでも明るく受け入れてくれたのは、きつとわたしがあなたの今までの人生の中で出会った事のない人種だったからに違いない。

あなたの領域に踏み込んだときには、わたしは既にあなたを好きになっっていた。

直感と云ってしまえば、その通りかもしれない。

気紛れと判断されてしまっても、反論が出来ない。

でも、自分の中には確信があった。わたしの直感に間違いはない、と。

わたしは直ぐにあなたに自分の気持ちを伝えた。

あなたは俄かには信じられず、からかわれているとずっと思っていたらしい。

当然の気持ちだ。

そして、あなたの思考回路にないわたしの言動に、呆れかえり、不思議がり、迷い、彷徨い、そのあとに、怒涛のような質問を私に浴びせかけた。

そんなあなたに対して、わたしは誠実ではなかったと今でも反省している。

愛は理屈じゃないんだ。どんなに不思議で問いかけたいことがあっても、言葉で口に出したり、文章で書き綴ってしまえば、陳腐な詩に過ぎない。

あなたの疑問は、逢ったときにすべて解決させるだけの自信と確信があった。

だから、あなたに逢う決心をして、それを6ヵ月後ではなく、3ヶ月早めて、空港に降り立ったのだ。

今日、ここに来ることは既にあなたにメールで伝えてある。

あなたは信じなかった。予想どおりの反応だ。

その次に、あなたは戸惑って、まだ逢わないと言いはじめた。これも予想どおりの反応だった。

「どうしても逢いたくなければ、空港に来なくてもいいよ。でも、私は必ず逢えると信じて向かう」

そう告げたら、あなたは覚悟を決めたようだった。

あなたが躊躇う気持ちは良くわかる。

だって、わたしはあなたの心も身体も奪いに行く、と告げたからだ。

愛が不変だなんて、そんな夢のような理想を言うつもりはないし、感情に流されて東京からここまで飛んできたなんて云うつもりもない。

わたしはあなたに心を奪われてしまった。そう、まだ見ぬあなたに。そして、わたしはあなたの心と身体を奪い返しにやってきた。

奪われたままでは不公平だから。

というより、わたしは奪われた心を満たすためにやってきたのかもしれない。

満たす・・・

気持ちの中だけでは、全てを満たすのに限界があった。

充実した人生を送るためには、描いている想像だけで満たされても幸せになれないことを知っていた。

だから、現実に戻って、本当の意味で幸せを掴むために、こうして南へ気持ちと身体を向かわせたのだ。

これが永遠の愛になることを信じて。

実際に逢ったとき、あなたはどんな顔をするだろうか。

抱きしめようとするわたしのことを受け入れるだろうか。

まったく自信がないくせに、妙に思ったとおりになるような予感がするのには、特に何の根拠もない。

わたしの希望に過ぎないのかもしれない。

でも、そんな気がする。

恥ずかしそうに照れながら、最初は「どうして・・・」という表情を作りながら、抱きしめようとするわたしの腕をかわしながら、でも、隙を見せているあなたは、すぐにわたしに捕まって、思いっきり抱きしめられてしまうのだ。

「こんなところで」と、ちょっとだけ非難めいたセリフを云う小さな唇を、わたしは自分の唇で塞いでしまう。

あなたはますます目を見張り、周囲に気を取られながらも、わたしの腕の中で静かに目を閉じ心酔してゆく。

しばらくしてから、少しだけ唇を離し、

「逢いたかった」

と、わたしは耳元で本心を囁く。あなたは黙ってうなづくことしかできない。

わたしの口づけの余韻で声にならないからだ。

それでも無理に喋ろうとするあなたを、微笑みながらわたしはあなたの唇に指を当てて、「何も言わなくていいんだよ」と目で合図を送る。

あなたは小さく頷いて、わたしの腕に自分自身を預けてくる。

すべてを受け入れた証だった。

そして、わたしたちはひとつになる・・・

私は、私の頭脳が止め処もなく妄想を膨らませていく中で、空港ターミナルから一步外へ足を踏み出した。

周囲を見回すことなく、私は被写体を捉えることができた。

信号の向こうに何度か写真で見たことがある笑顔が私の視界に入っ
たのだ。

少し戸惑っているように見える。予想通りだ。

でも、微笑んでいるようにも見える。期待通りだった。

やっぱり君は来てくれた。あんなに拒んでいたくせに。

嬉しそうな笑顔だった。でも、それ以上に満面の笑みを浮かべてい
るのは私の方だろうと思う。

思ったとおりの人だった。

いや想像以上に、可憐で、健気で、麗しくて、それでいて大人の艶
かしさを感じられるほどの色気を持っていた。

やがて目の前の信号が青くなる。

歩き出さない。身体が硬直したように、君は私を見つめたまま歩き
出さなかった。

そして、私が横断歩道を渡りきって、君の目の前に立ったとき、
君は何も言わずに私の胸の中へ飛び込んできていた。

桜の花びらが、春の風にのってどこからか二人を包み込んだとき、
君の唇が小さく「逢いたかった」と動いたのが見えた。

【終】

〳〵第5話 卒業一別れの手紙〳〵

初めに。

こんな日記でごめんなさい。

きつと面白くありません。（いつも面白くないケド。）

メッセージ的日記?!なので。

自己満的日記です。

えっ、いつもかな?!（焦;）

でもじゃあ何でここに書くんだろう？

この気持ちを誰かに聞いてほしいから？

慰めの言葉がほしいから？

今の気持ちを忘れたくないから？

それともあなを忘れたくないから？

頭の中を整理したいからかな。

自分でもよくわかんないです。

ただ、表しようのない今の気持ちが、ここで日記を書くことで紛れることは事実かな。

ここにこんな日記を書くこと、許してくださいまし。

もしも、もしもあなたが読んでくれることがあるのならば、電話では言い切れなかったこの気持ちが伝わるといういな。

他に好きな人が出来た？

とんでもないです。

他に出会いがあった？

とんでもないです。

一日中家にいて、私が何をしていたのか、あなたが一番わかってるじゃん。

飽きっぽい私。

でも、飽きたんじゃないやありません。
ホントです。

じゃあ何で？

はつきり言って、言葉に表しにくいよ。

そう、思ったよりずっとずっとずうーっと、真面目だったんです。
思ったより。
自分が知っている自分より。

そして、思ったよりずっとずっとずうーっと不器用でした。
思ったより。

自分が知っている自分より。
だからって、今まで自分が器用だと思ったことは一度もないけれど、
それ以上に器用じゃなかった。
言い換えれば、不器用の中の不器用だった。

付き合い初めの『気分転換にでもなればいいかな』っていう軽い気
持ち。

あなたとの関係が深まるにつれて、あなたのことを理解していくに

つれて、この気持ちに対して次第に疑問を抱くようになりました。
あなたに対して、失礼なんじゃないかなって思い初めて。

じゃあ気分転換の為のあなたじゃないあなたは、付き合ううえでは、私にとってなんなのか。

その答えは、『人生のパートナーとしてのあなた』としか考えられませんでした。

そう、あなたと付き合うイコールあなたとの結婚としてしか考えられなくなっていたんです。

誤算だったよ。

だって、そう思うようにならない自信があったもん。

初めは、結婚は考えないで付き合っていくって決めていたから。

あなたが言うように、私が軽い気持ちで付き合っていくことが出来たならば、こんなに早く卒業しなくて済んだのかもしれない。

いつからか、薄々付き合うイコール結婚って思う部分があったけど、そうとしか考えられない程だったとは。。予想外でした。

そう、私は自分が知っている自分より、真面目でした。

或いは、蓋を開けてみれば、あなたは、私が思った以上に誠実で真っ直ぐで魅力的で。。それ故、私の中で、軽い気持ちでの付き合いでは収まりきれなくなってきたのかな。。

あなたと付き合うということは、どういふことなのかの答えを探した時、『共に人生を歩む』ということ、それ以外思いつかないんで

す。

しかし、人生のパートナーとしてのあなたを考えた時、今の私には早すぎます。

今の私がそう、30歳前後だったならば、あなたが何度も冗談交じりに言ってくれたように、スグにあなたのところに行ったはずです。

だって何にも文句のつけようがないんだから。

経済的にも、勿論人柄的にも。

私にはとてもとても、もったいないくらいだもん。

だからこそ、何で私なのか、たくさん悩んだこともありました。

あなたにたくさんしてもらえばかりで、私はあなたに何をしてあげることが出来るのか、たくさん悩みました。

21歳の今、何故あなたとの道が選べないのか。

私に夢があるからです。

例えば今回叶わなかったとしても、チャンスの度に挑戦するつもりです。

じゃあ何故そこまで、夢にこだわるのか。

その夢とは私にとっての夢であり、今までここまで私を育て、可愛がり、愛情をたくさん注いできてくれた、両親を初め、祖父母の夢でもあるからです。

又、夢を叶えることが、両親祖父母を含め、その他親戚や今まで色んな形でお世話になった人たちへの恩返しにもなると信じているからです。

何故なら、夢を叶えるということは、自分の就きたい仕事に就くことが出来たということであり、同時に一歩だけ、一人前になったという一つの証となるからです。

この気持ちが変わることは、恐らくありません。
恐らくではなくて、きっと。

では、何故夢と同時に、あなたを掴む努力が出来ないのか、私が不器用だからです。

能力不足だからです。

夢とあなたの両立は、今の私には出来ません。

結局夢を言い訳にしてるといことなのでしょいか？
そう言われてしまえばそこまでのかな。

電話でこの気持ち、伝えることが出来たのでしょうか？

自信がないよ。

他の理由ばかりを話していたような気がします。

それに、声を聞くといつもあなたの包容力に負けてしまいます。

どこか矛盾していますか？

電話で話した理由と、ここに綴った思い、私は私にとって都合のいい解釈をしているだけなのでしょうか？

もし、そうだとすれば、もしあなたがそう感じるのだとすれば、ごめんなさい。

そして、私が至らなかったこと、ごめんなさい。

最終的に、あなたを傷つけることになってしまったこと、ホントにごめんなさい。

私がもらうばかりだったこと、ホントニホントニごめんなさい。

私はあなたからたくさんものを頂きました。

知識、勇気、安らぎ、癒し、元気、楽しみ、ホントの自分、そして
何より真っ直ぐで、誠実で、切実な、確かな愛情と温もり、e t c.
・
数え切れません。

ホントニホントニありがとう!!!!

逆に、私はあなたに何を渡すことが、伝えることが出来たのでしょうか。
うか。

最終的にあなたにとって、私との時間・交流は、あなたの考えを悲
観的な方向へと導くだけのものとなってしまったのでしょうか。

どうか、そうにだけはなっていないことを祈っています。

むしろ、どうか、そう思わないで下さい。

だって、私が至らなかったただけなんだから。

どうかどうか、悲観的にはならないで。

あなたに足りないものがあつたのではなくて、私が至らなかったんだから。

どうかどうか、悲観的にだけはならないで下さい。

だって、あなたと私の時間・交流が、あなたの考えを悲観的な方向へ導くだけのものとなってしまった時、あなたが私との時間を後悔した時、あなたと私の時間の全てを否定してしまったことになるよ
うな気がするから。

それだけは嫌です。

私のあなたとの時間は一生の宝物だもん。

それを否定したくもないし、否定されたくもないんだもん。

そして、いつか別れについての話をした際に、あなたが私に望んでくれたそれとは違った形になってしまったけれど、どうか私と過ごした時間を後悔しないでいてくれれば、私の、私はあなたに何も出来なかった、という気持ちだが、勝手ながら、少しは救われる気がします。

私は、私はあなたと過ごした時間に後悔はありません。
勿論この先も、後悔することはないでしょう。

だからこそ、別れとは言いたくありません。
『卒業』と言わせて下さい。

あなたと過ごした時間、あなたから頂いた数々の知識、勇気、愛情
etc、一生忘れません。

出来るならば、あなたも私のことを忘れないでいてほしい。
私と過ごした時間のことを。
私の全てを。

あなたは魅力的でした。

完璧すぎるくらい、完璧でした。

世の中どこを探しても、あなたみたいな人はそうそう見つからない
よ。

きつと。

いっからか、涙が止まって喉が渴いてきちゃったよ〜。。
身体がカラカラになっちゃった。
水分なくなっちゃった。

真っ直ぐで、誠実で、思いやりのカタマリで、仕事で疲れてるのに、睡眠時間を削ってまで相手をしてくれて、いつも包み込んでくれて、いつも喜ばせてくれて、楽しませてくれて、ホントニホントニ好きでした。

好きです。

でも、それよりも、夢を選びます。
家族、親戚、何より自分のために。
自分の人生に後悔を残したくないから。

夢だけを選びます。

両立が出来ないこと、改めてわかったから。
今のところ私は、ひとつのことだけを見てしまう、というより、ひとつのものしか見れない傾向にあるようです。

電話で話したように、周りの目が気になったこと、確かです。

それでも、ホントニホントニ好きでした。
好きです。

その気持ちに嘘はありません。
絶対に。

でも、でももう卒業です。
ありがとう。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9668v/>

LOVE・LOVE・LOVE

2011年8月23日23時23分発行